恋を売る家

大城立裕

新潮社

恋を売る家

城立裕

新潮社

恋を売る家

一九九八年四月一五日　発行

著者……大城立裕
発行者……佐藤隆信
発行所……株式会社 新潮社
郵便番号　一六二-八七一一
東京都新宿区矢来町七一
振替　〇〇一四〇-五-八〇八
電話　編集部〇三(三二六六)五四一一
読者係〇三(三二六六)五一一一
印刷所……大日本印刷株式会社
製本所……株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

¥1700-

© Tatsuhiro Oshiro 1998, Printed in Japan

ISBN4-10-374004-3 C0093

恋を売る家

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

闇が恋しい――と、朝子は思うことがある。自分をすっぽりと包み込んで、手を動かしてもそれを眼で追うことのできない闇。自分の身体をどう意識してよいか分からぬほどの、澄んだ闇がなつかしい。故郷の久高島にはそれがあった。

この家の周辺では闇が濁っている。海から這いあがった丘陵の斜面に建てた家のベランダからは、眼下に米軍基地の通信所がひろがって見える。眼には見えない不気味な電波を発信、受信していると思われる塔や柱が林立している。左端に三つ建っている事務所や宿舎などの施設も小さく見えるほど、天と地をつなぐような施設。そこでは終夜灯が半端に闇を封じ込めており、光は空にまで溶けわたって星影をかくしている。天を突いて立つ塔の向こうには太平洋からくびれた中城湾がひらけ、湾と外海とを限るように、左手に津堅島、右手に久高島がよこたわっている。

やはりここには家を建てないほうがよかったと、朝子は思う。郷里の久高島が見えるこの立地がよいかわるいか、判断に苦しんだ時期がある。ここにモーテルつきの住宅を建てようと、夫の英男が言いだしたときである。

一九八四年――朝子がこの福元の家に嫁に来て十二年目であった。

郷里が見えるのは、いつでも間近に実家の家族と会えているという錯覚を生じて有難いという反面、この場所と久高島とのあまりの違いをいつでも意識することになる。それが辛い。その違

いのひとつに闇があった。
久高島にはいつでも闇が、それも澄みきった闇があった。昼間の明るさも朝子にとっては闇にひとしかった。闇とは視覚のことだけでなく、一切の思念を容れない空間のことでもある。海沿いの道へ出れば、東端のカベール御嶽までまったく人影の見られない時間がある。海辺をかためた木麻黄の防潮林や阿旦のあいだからは季節を問わず風が吹いてくるが、それに紙屑などが巻かれて走ることもないし、人が歩けば風もその周囲を巻いて畑を流れ去るだけである。
潮騒にのって沖から白い馬が走ってきた、という伝説が島にある。朝子は、闇のなかでその白い馬が防潮林と闇を突き破って、カベール御嶽の方へまっしぐらに走っていくのを見たことがあった。学校にあがるすこし前のことであったか。そのことを母に話したら、まさか今どきと笑われたが、同じことを祖母に話したら、祖母は一瞬絶句したあとで言った。そうかそうか、白い馬を見たか。朝子は黄金の瓜実をもって御殿（大名屋敷）に登るよ、と言った。むかし黄金の瓜実が海からこの島に流れ着いたところ、それをもって男の子が首里王府のお城に上り出世したという伝説を、朝子はかねて聞いていた。祖母がその主人公を朝子になぞらえたのだ。その話を半信半疑で聞いたが、他のある日に父が漁から帰って美しい貝殻を見せ、これが黄金の瓜実だったらなあと笑ったときは、そこに揶揄を感じながらも嬉しく思ったものだ。
たしかその夜のことではなかったかと思うが、父が電灯を消して朝子に沖のほうを指して言った。
「あそこから白い馬が走ってくるわけさあ。それが久高島を駆けぬけて本島まで行って、アメリカー（アメリカ人）を蹴散らせたらなあ」
本島の中部あたりの米軍基地の様子を伝えるテレビもなく、朝子は新聞を読むにはまだ幼すぎ

た。それから十数年後にその基地のただなかに嫁に来ることになったのは、どういう運のめぐりあわせかと思うが、まさか自分が白い馬だとも思えず、さてはこれも黄金の瓜実の伝説にかなうことなのか――それにしても、この瓜実は黄金ではなかった。では何だったのか、朝子は十余年のうちに幾度か思いだしては人知れず首をかしげることになる。

闇を走るのが白い馬だとすれば、この照明で四六時中満たされている空間を走るのは黒い馬か。しかし、あのとき――福元英男と出会った二日間に幻視したのは、白でもなく黒でもなく、もっと豪華な色彩にあふれた馬が、福元英男の家のなかを走りぬける光景であった。朝子が二十二歳の若夏のころであった。

朝子は実家の民宿を手伝っていた。

島の民宿には時間がない。都会ではチェックインの時間とか定まっていると、朝子も聞いてはいるが、島ではそんなことはない。兄と弟が一人ずついるが、彼らはすでに島を出て町で働き、両親と三人でやっている民宿である。三つしかない部屋の客が出て行きしだい掃除をすませておけば、あとはいつ新しい客が来てもよいようなものだ。このときも、客が二人と見たところで、朝子の父が家のすぐ前の海に魚を釣りにでかけたのであった。

客の名が福元英男と西井栄長（にしいえいちょう）と宿帳で知ったが、玄関に立ったときに、若い福元英男が親ほども年上の西井栄長を供に連れている感じが、すこし異様であった。

「さすがに島だな」

と英男が客室のサッシを開け放って言ったのは、若夏らしい風のことであった。木麻黄の防潮林と阿旦の間から、まじりけの無い白砂と吸い込まれるような紺青の海が見えるが、そこから風が絶え間なく渡ってきた。

その風の感触が、その後二十年も朝子の記憶をたびたびゆさぶったが、それはまた、そのときの英男に好意を抱いた感情をも思いださせるものであった。

朝子より三つ年上だとあとで知ったが、口の利きかたはませていた。

五分刈りの頭髪の額に近い部分だけをわずかに伸ばしたスタイルは、髭のないふっくらとした頬との釣り合いで、いかにも坊っちゃんといった感じをつくっており、胸にうすいグリーンの刺繍をほどこした白の半袖シャツに、アイロンの効いたズボンが、島に遊びに来る都会者の服装だと思わせたが、その後の会話がまた、朝子をすこし意外な興味に誘った。

「那覇からいらっしゃったんですか」

「いや……」

英男ははじめてうすい笑みをもらした。

「牛を買いに来た」

「ウシ？」

朝子はつい問い返していた。

島に牛の放牧はたしかにある。しかし十頭ほどにすぎないし、それが食品以外の商品になるとは、朝子の想像をこえていた。

闘牛のために牛を買うという人を、朝子ははじめて見た。それが福元英男という、朝子より三つしか年上でない男であることが、朝子の興味をひいた。牛を買いたいから放牧をしている人を紹介してほしいと言われ、それから半日のあいだそのために付き合っているうちに、朝子の頭は闘牛にまつわるいろいろの知識を詰め込むのに忙しかった。闘牛では牛に名前をつけてある。人間とも犬とも違った、いろいろと面白い名前がある。なかでも嘉手納ヒチャルーというスターの

ような牛が有名だ。嘉手納の町で飼われている牛で、ヒチャルーとは光っているという意味だから、その牛の毛並みが光って見事だという意味であるらしかった。

知識を頭に詰め込む忙しさに全身が浮き浮きする思いだった。この日のすべてがなにか輝いて見えた。

牛を直接に買うのは西井栄長のほうだが、福元英男がそれに資金を提供しているのだ、と追い追い知った。福元英男がなぜか金を持っていて、もともと闘牛が好きなので、西井が飼っている六頭の牛のうち四頭は英男のものを預けて飼育させているのだ、という。この若い男がなぜ金持ちであるのか、知りたい思いも疼いたが、この知識だけは触れずにおいた。その遠慮がなにか夢を誘いこむように思った。

福元英男と西井栄長は、はじめは日帰りをするということであったが、英男の気が変わって、もう一日ひとりで泊ると言いだしたとき、朝子は訳もなく嬉しかった。

西井が最終便の連絡船で帰ったあと、まもなく日が暮れかかった。阿旦のかげをくぐり浜辺に出て、グンバイヒルガオが緑の毛氈を敷いたようにひろがっている地面に、紫色の花にかこまれて腰をおろし、太陽が知念の丘陵の向こうに沈むのを見ながら、英男が朝子に訊いた。

「なにか、変わった祭があるそうだな。……イザイホーと言った？」

「そうです、イザイホーです、よくご存じですね」

朝子の反応が早く、しかも饒舌に走ろうとする気配さえあった。それを相手が遮って、

「なにか、女が大勢で……」

それをどう繋いだらよいか、悩んでいる様子は、やはり複雑な祭だということを聞いているらしいと、朝子は察して説明を楽しんだ。

「十二年に一度、午の年の旧暦十一月にあるんですよ……」

十二年ごとに四日間もつづけられる、大きな祭である。島じゅうの女の祭だといってよい。男も関わるけれども、大方の男は女の引き立て役である。島の女は三十歳になれば、ナンチュと呼ばれる神女になる。老いるまでそのノロという立場で、年齢に応じてナンチュからしだいに階級があがり、祭のたびごとに神と向き合うことになる。祭の行事が複雑で、島の外から入ってきては窺い知れぬものがある。女たちが髪ふりみだし、裸足で円陣を組み歌うように叫ぶように声をあわせて踊りまわる賑やかな行事については、朝子はついに説明を中途でやめ、

「難しいさあ」

いくらか蓮っ葉なと自分でも思うような止めかたをした。

喉の奥まで出かかって出せない言葉があった。

女たちが祭ごとに神と向き合いながら、そのまま年をとって死んでいく、ということである。その言葉を出すのがなにか恐ろしい、という思いがあった。

島から住まいを移す人がふえてくる。男も女もいる。ただ、島を出るにあたって、男は何の抵抗も覚えないが、女の場合は心にかすかな刺のような痛みを覚えないではおれない。誰もが口に出すことはないが、あるとき、神様にすみませんと小さな声で謝ったよと、ひそかに朝子に話した先輩がいた。出ていった女のなかには、家族ごと引っ越した人もいるし、島に遊びに来た男に従いてひとりで出ていった者もいる。島の外の高校に進学したついでのように、そのまま帰らなかった者もいる。朝子が高校を卒業するとき、一緒に島から出ていた同級生が、そのまま那覇に引っ越すが、あんたもどう？　と誘いをかけてきた。そのとき、その誘いに乗っていたらどうなっていたろうか、と思うことがある。その友人はまもなく、那覇で水商売にはいったというが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

店では島の話で人気がある、と聞いている。
いま朝子は福元英男と話していて、それらをそっと思い浮かべていた。
〈イザイホーは、有難い祭のようなものではあるけれども、そこから逃げたいのも正直なところです……〉
その正直な気持ちを、いまはじめて会った男に語るのも、なにかの冒瀆になる、という気兼ねがある反面、話してしまいたい衝動があるのも確かであった。
これでよかったのかとも思い、つなぐ言葉を探しながら、知念の稜線に太陽が消えるのを見届けたとき、自分はいずれこの福元英男との付き合いがつづくのではないか、というぼんやりした予感が湧いた。
その思いはあるいは、彼女が話しているあいだじゅう、福元英男が無理に首をまわして熱心にその口許を見ている眼を、眩しい思いで見て魅かれたのでもあった。
〈この人は私に好意を抱いている……〉
それは年頃の娘として胸ときめくような感受であった。
のちに結婚しての初夜の褥で英男が告白したところによれば、やはりこの浜辺での語らいで、朝子が本島の娘に見られない魅力を発散していたという。その魅力というのは多分、朝子の言葉を発する先が海だけであって、その向こうには無限の測りしれない空間だけがあったからだろう。そして男と女の好意というものは、同時に寄せあうときに、その重みや匂いだけが二倍にも三倍にも膨らんで、中身も周囲も見えなくするものらしい、とはわずか三年後に朝子が省みての思いである。
福元英男があらためて手紙で結婚を申し込んできたのは、一か月後のことだが、それには、

「会って直接に申し込むのは恥ずかしくて」と書いてあって、自分が抱いた予感が間違っていなかったのが嬉しかった。この予感の指し示す道をまっすぐに行こう、と決心した。朝子は両親に相談することもなしに承諾の返事を出し、英男があらためて挨拶に来たときは、両親に叱られながら、自分のこれからの人生に自分で責任をもつと、大きなことを言って、夏のあいだに家出同然のかたちで英男に嫁いだ。

「久高島から嫁をもらうなんて、運命のようなものだよね」

姑のミトがため息をつくように言った。

結婚式をすませて、二人が床に入ろうとすると、英男の母のミトがいきなり二人を誘って部落の下に降り、基地のフェンスのすぐ外まで来た。

そのあたりはもと東海岸沿いの幹線道路であったのに、その道路も基地のために海沿いにおしやられた。道路に沿っていた住宅地は基地にすっぽりと包まれ、住民は山の手に押し上げられた。もとの部落の後背地にわずかな高台をなしていた御嶽とそれを包んだ森だけが、戦争の前の姿を留めている。しかし、御嶽に古来受け継がれてきた祭が戦争のあと絶えると、まもなく薄や萱などの雑草に覆われて、いまでは御嶽の面影が見えにくい。

真向かいの海は闇に沈んでいる。人々が平地に住んでいたころは、闇のなかでも久高島の稜線はわずかに水平線から浮き出ていたが、岡に押し上げられて以来、まったく海の闇に沈んでしまうようになった。それが御嶽の位置まで降りてみると、懐かしいほどのかたちで見えた。ミトはそれを指しながら言ったのである。

ミトがこの吉浦部落のノロで、その家が神女殿内（のろどんち）であると、朝子はこの結婚式の日にはじめて

知らされた。
「響(とよ)む中城という歌を知っているか」
と、ミトは朝子に問うた。久高島から中城に嫁いできたばかりの朝子が知るはずがなかった。
「響む中城　吉の浦のお月　御影(みかげ)照りまさて　銹(さび)や無(ね)さみ」
ミトは得意げにすこし高い調子で、唱えて聞かせた。
世に名高い中城の吉の浦という海にいま月が照っていて、その輝きには一点の曇りもない、という意味の古い琉歌である。吉の浦に沿った部落の誇りを語って聞かせたものと、朝子にも理解がいった。
〈ならば、その吉浦の神女殿内に嫁に来た者の光栄は、おのずから心得ていよう……〉
という含みをミトが言外に匂わせている様子も窺えた。
神女殿内の長男の嫁はいずれ姑の跡を継いでノロになるさだめだということを、幸か不幸か朝子は知っていた。
それにしても、ミトが福元幸信と結婚してノロを務めたのは、沖縄が戦場になる前の一年足らずにすぎない。そして戦後は多くの村落が祭を絶やしているにもかかわらず、ミトがこれだけの執念をもっているのかと、朝子はまもなく胸を責められて驚くことになる。
「ここに森があって、それに包まれて御嶽がある」
とミトが言ったとき、朝子はあたりの風景をあらためて想像のなかで復元するとともに、ミトが何を言いたいのか、ほぼ察することができた。
「その御嶽がどれほど大切か、久高島に育った朝子さんなら、よく知っているだろう」
朝子はつい頷いていたが、

「朝子にノロを継がせようというのか……」
そばで英男がいきなり口をはさんだ。
「神女殿内など、もうどこの村にもないのだよ」
「ないことはないさあ……」
ミトがただちに応じた。
「とにかく、神女殿内を建てなおす。私が生きているうちに……」
ミトが朝子の気持ちをも断ち切るように言った。
「さいわい、朝子さんが跡を継げるからね」
これがすべての事の始まりであったか、終わりであったかと、のちのち朝子は思いおこした。
「基地の金網のすぐ前に神女殿内を建てても、神様が来てくれるものか」
「金網のすぐ前でも、御嶽は滅びていないさあ」
朝子は、眼下で強烈な灯火をもって闇を排しながら黙している通信基地を見下ろした。神女殿内はまだある、あるいは建てなおせる、とミトが言うのは、久高島に照らしてみればたしかにその通りに違いないが、しかし、この基地を見て思うに、英男が言うのがおそらく正しいのではないか。早い話が、自分が久高を出て英男と結婚したときの気持ちを思いだせば、理解できる体のことだろう。自分の頭のなかで神の島はすでに死にかけていたのだ。
「昔からある部落のことだよ。しかも沖縄みんなが日本復帰したんだよ」
ミトは引っ込めようとしなかった。
朝子は意表をつかれた。なるほど、日本復帰したのか。二か月とすこし前に、アメリカ占領から日本に復帰した。ドルから日本円に切り換えた当時はまごついたが、それにもなんとか慣れた

ようである。それにつれて、古い神事も復活の兆しがあるものと見てよいのか。しかし、この金網を見てはどことなく遠いものの話をしているようで、実感が湧かないことも事実である。

「羞ずかしいさあ」

「なにが羞ずかしいか。ここは、うちの土地だ。すぐ傍に御嶽と森がある。そこは部落の土地だ……」

福元家は神女殿内で、古来、御嶽とともに部落の全体を抱きかかえるかたちで、部落の最後背地にひろく構えていた。そのことを説いた上で、

「そこに神女殿内を造ることは、部落の祖先にたいしても義務というものだ」

山の手に押し上げられてから、十八年をへていた。

その十八年間たえず、ミトは神女殿内の再興にこだわったのである。

山の手に新しい――というより、臨時の部落を構えることになったとき、部落では揉めた。その地域に誰もが土地を所有するとは限らないからである。広い私有地に借地する者もあり、字有地を提供される者もいた。

福元家の屋敷は部落の後背地にあったために、かろうじて接収から免れてはいるが、部落全体が山の手に引っ越した以上、神女殿内だけが下にいるわけにいかないと、ミトが判断した。ところが、福元の家はこの新開地に所有地がなく、かろうじて割り当てられた字有地は、眼の前に屋根ほども高い珊瑚礁の岩をひかえていた。

ミトは、正面に海が見えないという不満をもらした。豊穣をもたらす神は、海の向こうにあるニライカナイから到来する、という信仰をまだ抱いていて、新開地への移住にあたってもそれを主張したが、屋敷の割り当て計画の上で部落の人たちの賛同を得られなかった。彼女はその不満

を腹にため込んだ。
〈やはり、下であってもよいから、神女殿内を建てよう……〉
いずれその場所に住宅を建て、御嶽も復活させようと、ミトは願いつづけた。が、さすがに言いだし得ないままに、ここまできた。部落の人たちを説得するだけの自信を持てなかったのである。
その躊躇(ためら)いを、朝子という嫁を迎えたときに吹っ切ったことになる。
「こんな御嶽や井戸に、もう神様が来るものか」
英男の割り切った言葉に叩かれると、ミトは英男が怯(ひる)むほどの眼つきで息子を睨んだ。かすかに気にしていたことを、息子に指摘されたという顔である。
御嶽の入り口に井戸があるが、それが戦争のあとに様変わりした。
戦争の前までは、御嶽への入り口にある井戸として、祭ごとにミトを先頭に部落の主だった人たちがそろって拝んだ。家庭の井戸は炊事の用途とともに洗濯にも用いられるが、この御嶽井戸だけは洗濯に用いることを禁じられていた。飲料水として汲む人も、そう多くはないが絶えなかったから、澱(よど)むことがなくいつも新鮮でおいしい水であった。
それが戦争のあとまったく使われなくなった。戦争のときに人が転落したりして、げんに死体がそのなかから発見されたりしたからである。飲めない水を底にわずかに湛えている。臭気こそ立ちのぼってこないが、覗いて水面に写る顔もこころなしか汚(よご)れて見える。御嶽という柄ではない、という言葉もどこからか聞こえるようだ。
〈やはり……〉
と思いなおした表情で、ミトは引き退った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com